

王朝の文人と江戸漢詩

杉下 元明

—

鈴木健一「詠史詩覚書」⁽¹⁾は、近世後期の詠史詩集十八点を紹介するが、その最初に名があがるのは岡田新川の『晞髮偶詠』(安永九年・一七八〇)である。『晞髮偶詠』は上下二巻から成り、下巻には歴史上の人物を題とする七言律詩百首をおさめる、詠史詩の流行を先導したといふべき作品である。百首のうち、王朝時代(かりに平安遷都以降、保元の乱までとしよう)の人物を詠んだ漢詩が、およそ三分の一を占める。「嵯峨隱君子」、「坂上大納言田村」(坂上田村麻呂)、「良岑大納言安世」(良岑安世)、「逢坂隱士蟬丸」(蟬丸)などがそれである。

この比率は、低いものではない。明治十六年に刊行された大沼枕山『日本詠史百律』をこれと比較してみよう。『晞髮偶詠』下巻と同じく百首の七言律詩をおさめるこの詩集に、王朝時代の人物を詠んだ漢詩は、「菅公」(菅原道真)と「菅三品」(菅原文時)の二首をおさめるに過ぎない。

江戸時代後期(および明治初期)には多数の詠史詩集が刊行されたが、そのなかで王朝時代の人物を多く詠んだものとして、『晞髮偶詠』以外には、『畏堂詠史百絶』『咏史百絶』『皇史摘詠』『読史雜詠』をあげることができる。この五つの詩集

で詠まれた王朝時代の人名を一覧表にした。

尾張浜主	○				
坂上田村麻呂	○	○			
菅原清公				○	
空海	○				
藤原緒嗣				○	
藤原冬嗣				○	
和気真綱				○	
坂上苺田麻呂				○	
良岑安世				○	
藤原高房				○	
藤原常嗣				○	
山田古嗣				○	
紀夏井	○			○	
橘逸勢				○	
生駒仙人				○	
橘氏				○	
喜撰	○				
源清				○	
嵯峨隠君子	○				
出雲広貞				○	
広人				○	
小野篁	○			○	
藤原良繩				○	
大江音人				○	
都良香	○			○	
在原業平	○			○	
忠貞王				○	

廢太子恒貞	○				
遍照					
藤原基経					
源融				○	
藤原諸葛				○	
藤原保則	○				
橘広相				○	
橘吉俊				○	
大伴黒主	○				
橘良基				○	
孝僧				○	
衣縫金継女				○	
蝉丸	○				
凡河内躬恒				○	
小野小町	○				
松風・村雨	○				
小野美材				○	
菅原道真				○	
紀友則				○	
在原行平				○	
藤原時平				○	
三善清行				○	
醍醐天皇				○	
宇多天皇				○	
平将門				○	
藤原純友				○	
紀貫之	○				

王朝の文人と江戸漢詩

紫式部	藤原利仁	藤原秀郷	脩然	源經基	藤原実方	源満仲	藤原道兼	藤原朝光	藤原高光	藤原兼家	平貞盛	兼明親王	具平親王	源順	藤原兼通	村上天皇	重明親王	紀内侍	宗岡秋津	巨勢金岡	菅原文時	藤原在衡	小野好古	小野道風	大江朝綱	源公忠	藤原忠文	
	○	○			○																			○		○		晞髮偶詠
	○	○														○												畏堂詠史百絶
									○	○								○	○					○	○			咏史百絶
	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○				○	○				○	○	○	○	○	○	○		皇史摘詠
											○	○	○															読史雜詠

藤原仲成	大江匡房	阿倍宗任	源義家	源經信	丹波雅忠	白河天皇	源隆国	藤原兼房	阿倍貞任	金田時光	安倍晴明	橘直幹	赤染衛門	清少納言	源頼義	藤原頼通	藤原教通	能因	源頼信	藤原実資	藤原公任	藤原保昌	寂照	藤原道長	藤原行成	源頼光	大江以言	
	○			○			○				○								○				○		○	○		晞髮偶詠
	○		○	○	○	○					○	○							○					○		○		畏堂詠史百絶
	○		○	○	○	○				○		○	○															咏史百絶
○	○	○	○					○	○	○				○	○	○	○			○	○		○		○			皇史摘詠
														○														読史雜詠

もつとも多くの詩集で共通して詠まれたのは、四つの詩集に詠まれた七人。すなわち坂上田村麻呂・小野篁・都良香・菅原道真・紀貫之・菅原文時・大江匡房である。

三つの詩集に詠まれた八人がこれにつぐ。すなわち良岑安世・紀夏井・藤原保則・小野道風・紫式部・源頼光・安倍晴明・源義家である。

二つの詩集に詠まれたのは二十二二人。すなわち空海・藤原冬嗣・嵯峨隠君子・在原業平・藤原基経・源融・蟬丸・三善清行・平将門・藤原忠文・平貞盛・藤原兼家・藤原秀郷・藤原利仁・藤原道長・藤原実資・能因・源頼義・清少納言・源隆国・丹波雅忠・源経信である。ただし嵯峨隠君子については問題があるので、五章でも触れる。

試みに『平安時代史事典』（平成六年、東京、角川書店）をひもといてみよう。「藤原道長」の解説に七十七行（「史料」をのぞく。以下同様）、「菅原道真」の解説に六十六行、「藤原基経」に五十九行がつけやされているのに対し、「都良香」の解説は二十八行、「菅原文時」の解説は二十一行、「大江匡房」は十九行、「小野篁」は十三行に過ぎない。

このように、江戸漢詩に詠まれる頻度は必ずしも一般的な知名度に比例しないのであるが、これは「今日からみた知名度」についていえるだけではない。おそらく江戸時代における知名度とも一致しないのである。

岡田三面子編『日本史伝川柳狂句』（中西賢治校訂、昭和四十七〜五十五年、東京、古典文庫）という、二十六冊から成る浩瀚な書物がある。日本史上の人物を詠んだ江戸時代の川柳・狂句を集成し、菅原道真を詠んだものだけでも約千三百句に達する（誰を詠んだ句とすべきか、かなり恣意的な面もあるのだが）。在原業平や小野小町もそれぞれ約七百句もある。ところが大江匡房を詠んだ川柳・狂句は二十三句、小野篁は十九句、都良香は十七句に過ぎず、菅原文時を詠んだものもたったはこの本に一句も見えない。詠史詩において有名になるには、同じ江戸文学でも川柳・狂句の世界とはまったく別の原理が働いていることがわかる。

ではその原理は何か。

次章以降は菅原文時を中心に、近世後期の詠史詩で王朝時代がどのように詠まれたかを検討しつつ、その原理を考察してみたい。

二

菅原文時は、道真の孫。天徳元年（九五七）に文章博士となる。天元四年（九八一）、八十三歳で没したが、死の年の正月に従三位に叙せられたことから「菅三品」とも呼ばれる。

『晞髮偶詠』におさめる「菅文章博士文時」は、次のような詩である。

御前陪宴講文章 御前 宴に陪して文章を講ず

偶見宮鶯囀曙光 偶たま見る 宮鶯の曙光に囀るを

更有雄篇凌帝座 更に雄篇の帝座を凌ぐ有り

且將辞色動朝堂 且つ辞色を將て朝堂を動かす

崇班已得升三品 崇班已に三品に升ることを得

善佻還堪擅一場 善佻還て一場を擅にするに堪へたり

自無名家無忝祖 自づから名家 祖を忝はづかしむること無し

最欽千載独流芳 最したも欽ふ 千載独り芳を流すことを

頸聯が最晩年に三位を得たことを指し、尾聯が祖父菅原道真の名をはずかしめなかったとうたっていることは、いうまでもない。

首聯は『江談抄』（第五）にみえる、次の逸話にもとづく。

また談^{かた}られて云はく、「村上の御時、『宮鶯曉の光に囀る』の題の詩に、文時三品を召して講せしめられしに、その間の物語は知らるるか、いかん」と。答へて云はく、「知らず」と。語られて云はく、「尤も興有ることなり。件の日は村上と文時と相互に相論の日なり。件の御製に云はく、『露濃やかにして緩く語る園花の底。月落ちて高く歌ふ御柳の陰』と作らしめ給ふを、文時、『西楼に月落ちて花の間の曲。中殿に灯残つて竹の裏の音』と作りたりければ、主上聞こしめして、『我こそこの題は作り抜きしたれと思ふに、文時の詩またもつて神妙なり』と仰せられて、文時を召し、御前に近づけて、『偏頗なく我が詩の事、憚りなく難の有無を申せ』と仰せらるるに、(略)蔵人頭を召して仰せらるるやう、『もし文時この詩の勝劣を申さず、実に依りて申さしめずは、今より以後、文時の申す事、我に奏達すべからず』と仰せらるるを聞きて、文時申して云はく、『実には御製と文時が詩と対座に御座す』と申すに、『実に誓言を立つべし』と仰せらるるに、また申して云はく、『実には文時が詩は今一膝居上りて侍り』と申して、逃げ去り了^{きは}んぬ。主上感歎せしめ給ひて、涕泣し給ふ』と云々。⁽²⁾

同じ逸話は『今昔物語集』巻二十四⁽³⁾にもみえるが、そちらでは『宮ノ鶯曉ニ囀ル』ト云題ヲ以テ詩ヲ作ラセ給ケリ』と書かれていて、「宮鶯囀曉光」ではない。岡田新川は『今昔物語集』によつたのではなさそうだ。なお、領聯の「凌帝座」については後述しよう。

次に『畏堂詠史百絶』。松代の小林畏堂の著で、天保三年(一八三二)に刊行された。この詩集におさめる「菅原文時」では、起句にこの逸話が詠まれている。

豈啻詩才犯帝坐 豈に啻だ詩才の帝坐を犯すのみならんや

阜囊封事見殷憂 阜囊の封事 殷憂を見る

惜哉銳意矯時弊 惜しいかな 銳意 時弊を矯め

甲兵脩武不及謀 甲兵脩武 謀に及ばざるを

承句の「阜囊」は、黒い帛の袋。上書を奉ずるのに使う（「殷憂」は、大いに憂えること）。天徳元年（九五七）に意見封事三箇条を提出し、奢侈や売官を禁じるなどしたことを指す。結句の「脩武」は、修武と同じであろう。天慶三年（九四〇）の平将門の乱などに対して有効な手立てが打てなかったことを詠んだものか。なお、この詩にも「犯帝坐」という表現が出てくることは興味深い。

次に『咏史百絶』。この詩集は嘉永二年（一八四九）刊、ひがし東夢亭の著だが、「菅原文時」を二首おさめる。そのうちの一首を掲出する。⁽⁴⁾

曾陪御宴詠宮鶯 曾て御宴に陪して宮鶯を賦す

聖藻天葩不可評 聖藻天葩 評すべからず

月落燈殘中殿暁 月落ち燈残る 中殿の暁

静聞花底柳陰聲 静かに聞く 花底柳陰の声

転句には「西楼月落花間曲…」という文時の対句が、結句には「露濃緩語園花底…」という村上天皇の対句が詠みこまれている。

『皇史摘詠』は明治四年刊。著者の金本摩斎は伊丹の明倫堂教授をつとめ、また横井小楠暗殺にかかわって入獄した。この詩集にも「菅原文時」をおさめる。

献句工於睿藻工 句を献じて睿藻の工よりも工なり

暮年還嘆宦途窮 暮年還た嘆ず 宦途窮まるを

詞壇当日誰勅敵 詞壇当日 誰か勅敵ぞ

唯有江家後相公 唯だ江家の後相公有り

起句に、村上天皇の詩以上に文時の詩はたくみであったとうたわれている。なお結句の「江家後相公」は、大江朝綱。朝

綱が文時とならび称されたことは、『古今著聞集』巻四にみえる説話等によって名高い⁽⁵⁾。

あるいは大槻磐溪の『国詩史略』。この詩集は歴代天皇別に詠史詩を配列するので、「菅原文時」と題する詩ではないが、「村上帝朝」にみえる次の詩が、文時を詠んだものである。

聖作清新韻致深 聖作清新 韻致深し

菅生得得是何心 菅生得得 是れ何の心ぞ

暁園試聴宮鶯囀 暁園試みに聴く 宮鶯の囀

竹裡争知御柳陰 竹裡争か知らん 御柳の陰

「宮鶯囀暁光」の題が転句に、「中殿灯残竹裏音」と「月落高歌御柳陰」という詩句が結句に、詠みこまれている。

最後に大沼枕山『日本詠史百律』について。この詩集におさめる王朝時代の人物は「菅公」と「菅三品」しかないということとは、一章で触れた。「菅三品」を掲出しよう。

忠讜能兼語气温 忠讜能く語気の温なるを兼ね

也知家世古風存 也^また知る 家世 古風の存するを

佳聯早已過皇製 佳聯早く已に皇製に過ぎ

封事還能塞俗源 封事還た能く俗源を塞ぐ

薄命不昇三鼎職 薄命昇らず三鼎の職

多才敢忝大賢孫 多才敢へて忝めんや 大賢の孫

吾欽一種殊平素 吾は欽ふ 一種 平素に殊なるを

水上花光献麗言 水上花光 麗言を献ず

「宮鶯囀暁光」の逸話は、この詩では第三句に詠まれている⁽⁶⁾。なお第六句は、岡田新川「菅原文章博士」の第七句を思い

出させる。

三

以上、菅原文時を詠んだ江戸漢詩をみてきた。文時については漢詩文にまつわる逸話が知られているため、詠史詩にこのんでうたわれた、という面が大きいのであろう。

一章で、もつとも多くの詠史詩集で取りあげられた人名としてあげたのは、文時以外では坂上田村麻呂・都良香・小野篁・菅原道真・紀貫之・大江匡房であった。良香・篁・道真・匡房もまた、漢詩文にまつわる逸話が多く知られている人物でもある。

たとえば『皇史摘詠』におさめる「小野篁」は、次のとおり。

不但詩情合樂天 但だに詩情の樂天に合するのみならず

羈淪同跡亦堪憐 羈淪跡を同じうす 亦た憐れむに堪へたり

滴行吟就青衫湿 滴行吟就^なり青衫^{うるは}湿ふ

恰似潯陽病臥年 恰も似たり 潯陽 病に臥すの年に

起句は『江談抄』（第四）にみえる逸話に由来する。「閣を閉ぢて唯聞く朝暮の鼓。樓に登りて遙かに望む往來の船」という嵯峨天皇御製にまつわる逸話である。⁽⁷⁾

白氏文集の一本の詩、渡来して御所に在り。尤も秘藏せられ、人敢へて見るることなし。この句はかの集に在り。叡覽の後、すなはちこの觀に行幸せられ、この御製有るなり。小野篁を召して見せしめたまふに、すなはち奏して曰はく、「『遙』をもつて『空』と為さば、いよいよ美^よかるべし」といへり。天皇大いに驚き、勅^{のたま}して曰はく、「この句は樂天の

句なり。汝を試みたるなり。本は『空』の字なり。今、汝の詩情は楽天と同じきなり」とのたまへり。文場の故事、尤もこの事に在り。よりにて書す⁽⁸⁾。

金本摩斎は、篁の詩情が白楽天と同じものであったということにくわえて、隠岐島へながされるなどした数奇な人生も白楽天に共通するものであったと詠んでいる（「青衫」「潯陽」は、白楽天「琵琶行」を踏まえる）。

あるいは『晞髮偶詠』の「菅大政大臣」すなわち道真を詠んだ詩は、次のとおり。

一出儒林得主歡 一たび儒林を出でて主歡を得たり

塩梅重寄表衣冠 塩梅の重寄 衣冠に表す

禍来萋菲言先入 禍ひ来たりて 萋菲 言 先づ入り

謫去風波語更難 謫し去りて 風波 語 更に難し

恋闕時時陳御服 闕を恋ひて時時 御服を陳じ

呼天夜夜歩空壇 天を呼びて夜夜 空壇に歩す

疾雷殊発金滕悔 疾雷 殊に発す 金滕の悔

享祀長為社稷看 享祀長く社稷の看を為す

第五句は有名な「恩賜の御衣は今此に在り」（「九月十日」）を念頭に置いている⁽⁹⁾。

坂上田村麻呂と紀貫之のような別格の有名人（たとえば田村麻呂は謡曲「田村」、貫之は「蟻通」によって知られた人物でもある）をのぞけば、江戸の詠史詩でこのんでうたわれる王朝時代の人士は、漢詩文にまつわる逸話をのこしている人物がその中心であるということが、ひとまずの結論としていえそうである。

ちなみに近世の詠史詩集で最も有名なのは頼山陽『日本楽府』（文政十三年・一八三〇刊）であろうが、この詩集におさめる六十六関のうち、王朝時代を詠んだのは以下の十一関である。

桓武天皇と蝦夷征伐を詠んだ「城井沢」、藤原一族の台頭を詠んだ「髻亂天皇」、菅原道真を詠んだ「賢聖障子」、醍醐天皇を詠んだ「脱御衣」、朱雀天皇を詠んだ「太絃急」、承平・天慶の乱を詠んだ「檢非違使」、天曆の治を詠んだ「主殿寮」、藤原道兼らを詠んだ「七日関白」、藤原道長を詠んだ「月無缺」、前九年・後三年の役を詠んだ「赤白符」、後三条天皇を詠んだ「劍不可伝」。

ほかの詩集との比較のため、二つの詩をあげる。ひとつは「賢聖障子」。寛平年間に天皇が巨勢金岡に描かせたとされる障子で、魏徵・諸葛亮・張良・管仲ら三十二人の賢者がえがかれていた。

紫宸障子列賢聖 紫宸の障子賢聖を列す

衣冠済済欲拝跪 衣冠済済拝跪せんと欲す

可惜無精神 惜しむべし精神無し

何時猷可否 何れの時か可否を猷ぜん

画龍求龍真龍出 龍を画き龍を求めて真龍出づ

呼雲釀雨雨未起 雲を呼び雨を釀して雨未だ起こらず

逐龍入湫龍窮死 龍を逐ひて湫に入れ龍窮死す

画龍依旧侍天子 画龍旧に依りて天子に侍す

忠臣たちがえがかれた賢聖障子から語りおこし、それに精神がともなっていなかったと評したあと、「真龍」というべき菅原道真が現れたこと、しかし彼が追放されさびしく死んだあとは旧態依然とした家臣しか朝廷にのこらなかつたとむすぶ。

もうひとつ、「七日関白」を掲出しよう。

宮門月明宮漏遅 宮門月明らかにして宮漏遅し

天子欲出猶遲疑 天子出でんと欲して猶ほ遲疑す

微雲蔽月君速出 微雲月を蔽ひて君速やかに出づ

太史門前促君馳 太史門前も君を促して馳す

君先薙髮臣辞父 君は先づ髪を薙ぎ臣は父に辞す

父撫掌 子起舞 父は掌を撫し 子は起ちて舞ふ

表姪為帝爺当国 表姪は帝と為り爺は国に当たたる

吾博七日関白職 吾は博す七日の関白職

中心になるのは、『江談抄』(第二)のほか、『大鏡』『愚管抄』などでも知られた、藤原兼家と道兼が花山天皇に出家をすすめた折の逸話である。花山天皇が内裏を出て(第四句は、このとき安倍晴明の家の前をとおつたとされることを踏まえる)、髪をおろしたとき、道兼もともに出家すると言っていたが、父に挨拶すると言ってもどつてしまひ、そのままかえつて来なかつた。こうして父(兼家)と子(道兼)は天皇をだまして出家させ、道兼の甥(表姪)である一条天皇が即位する。道兼も死の間際には関白となり、「七日関白^⑩」と呼ばれた。

このように権力争いにまつわる逸話が中心で、ほかの詠史詩集のような、漢詩文にまつわる風雅な逸話はほとんどない。また、構成の点でも差がある。一般に詠史詩は、特に絶句で詠まれた場合には、評価をあたえるではなくひとつの逸話をそのまま漢詩になおしたような作品が多いのだが、『日本楽府』の場合にはたとえば巨勢金岡のえがいた障子と菅原道真の失脚、あるいは花山天皇の出家と藤原道兼の関白就任のように、複数の逸話が組み合わされた複雑なものとなり、また「惜しむべし精神無し」のごとく、その事件に対する評価の(ときには言外に)窺えるものが多い。

『日本楽府』は著名な詩集ではあるものの、そういう意味では詠史詩集のなかで、やや異色の存在といえる。

四

三章で名の出た兼家は、『咏史百絶』や『皇史摘詠』でも詩に詠まれた。前者におさめる「藤原兼家」を掲出しよう。

兼家は延長七年（九二九）生まれ。太政大臣、摂政、関白を歴任した。子の道兼と共謀して花山天皇を出家させた逸話は、この詩では承句に詠まれている。また、兄兼通との確執も有名で、この詩では起句に詠まれている。

官途兄弟各争先 官途兄弟各々先を争ひ

瞞了華山脱屣年 華山を瞞了了す 脱屣の年

夢兆不愆逢坂雪 夢兆 あやま 愆らず 逢坂の雪

果為関白握朝権 果して関白と為りて朝権を握る

転・結句については、注記が参考になる。「兼家、初め納言たなり。逢坂を過ぎ雪に値あふを夢みる。覚めて之を悪み、以て占者に問はしむ。曰く、『吉なり。公、斑牛を獲る有り』と。人有り、果して斑牛を遺す。兼家、其の術を高しとして厚く贈りて之に遣はず。大江匡衡に語る。匡衡曰く、『是れ占叶はず。今、夫れ逢坂は関なり、雪は白なり。公、其れ関白為るの兆か』と。明年果して頼忠に代わりて関白と為る」。夢にみた「逢坂関」の「雪」は「関白」になる予兆であったというこの逸話もまた、『江談抄』（第一）に見える。

すでにみたように、江戸漢詩には『江談抄』にみえる逸話を詠みこんだものが多い。菅原文時や小野篁もそうであった。これは偶然であろうか。

実はこれらの逸話には共通点がある。どれも寛延三年（一七五〇）に刊行された『大東世語』にみえるのである。

『大東世語』は服部南郭の著。『世説新語』の形式にならって、主に平安時代の我が国の人物の逸話を「德行」「言語」「政事」などに分類し、漢文でしるしたものである。徳田武1および堀誠に一連の研究があり、特に出典に関しては『江談抄』を

はじめ『古事談』『古今著聞集』あるいは六国史などから逸話が採られていることは、「『大東世語』「德行篇」注釈稿⁽¹²⁾」にはじまる堀氏の研究に詳しい。

兼家のそれは、『大東世語』卷三（規箴）におさめられている。書き下して掲出する（括弧内は、原文では割注。以下同様）。

藤公兼家、納言作る時、相阪関にして雪に値ふと夢む。疑ふ、是れ凶かと。之を占せしむ。占者云はく、「吉なり。必ず応に斑牛を遣ること有るべし。是れ其の兆なり」と。果たして斑牛を献すること有り。公悦びて厚く占者に賜て其の奇中を賞す。既にして江吏部（匡衡）至る。公、之を語る。江云はく「是れ失占なり。夫雪は白のみ。関にして白に値ふ、公、関白に陞るに非ざることを得んや（関白は丞相なり）。明年果たして丞相を拜す。

なお、兼家と道兼が花山天皇をだまして出家させた逸話は、安倍晴明を主役とする形ではあるが、『大東世語』卷四（術解）に見えている。

小野篁の逸話は、『大東世語』卷二（文学）におさめる。

弘仁帝の時、白氏文集一部、独り秘府に蔵む。世未だ睹る者有らず。帝、河陽館に幸し、詩を賦して云はく「閣を閉ぢて唯だ聞く朝暮の鼓。楼に登りて遥かに望む往來の船」。本と白氏の一聯なり。試みに野篁に視す（野篁、参議峯守の子なり。初幼、父の遊に随ひ、京に帰る。頗る弓馬を好み学を事とせず。後、慙悔し学に志す。十三にして文章を試み及第す。官、参議に至る）。篁曰く「聖製、遥を改めて空に作らば更に妙なり」。帝驚きて曰く「此れ樂天が句なり。本と已に空に作る。聊か卿を試みる。乃ち卿が詩情、已に白氏と同じきに至るか」。

二章でみた菅原文時の逸話も、卷二（文学）におさめられている。

天曆帝、常に文臣菅文時等を召して文を論ず。帝、詩を以て文時に勝ると自負す。曾て「宮鶯曙光に囀る」を題して君臣同じく賦す。帝の作先づ成る。云はく「露濃やかにして緩く語る園花の底、月落ちて高く歌ふ御柳の陰」。以為らく

庄巻なりと。文時が作に及んで云はく「西楼月落つ花間の曲、中殿燈残る竹裡の音」。帝悵然として謂へらく「及ぶべからず」。因て文時に命じて御製を評せしむ。(略) 因て侍中を顧みて曰く「若し言を尽くさざる所あらば、異日奏する所、都て停て受くること勿れ」と。蓋し恐嚇する為に其の実を吐くことを欲す。文時曰く「実には持と称すべし」と。帝強ひて詛誓せしむ。文時曰く「臣が詩、実には帝坐を犯して升ること一等」と。乃ち帝愈々感賞す。

ここで「帝坐を犯して」という表現が出てくることは興味深い。岡田新川の「菅文章博士文時」は「更に雄篇の帝座を凌ぐ有り」と詠み、小林畏堂の「菅原文時」は「豈に奮だ詩才の帝坐を犯すのみならんや」と詠んだ。「帝坐(帝座)」という表現が『江談抄』になかったことを考えると、新川や畏堂は『大東世語』を参看しながらこれらの詩を詠じていた可能性が考えられよう。

五

視点を變えてみよう。『畏堂詠史百絶』に「源清」という詩をおさめる。

富貴功名氣已除 富貴功名 氣已に除く

官廬何及野人廬 官廬何ぞ野人の廬に及ばん

斯身好伴閑猿鶴 斯の身好し伴ふ 閑猿鶴

且喜皇家結網疎 且つ喜ぶ 皇家 網を結して疎なるを

「源清」は『平安時代史事典』によれば、生没年未詳。嵯峨天皇の皇子であるが、さほど有名とおもえないこの人物が詠まれているのは、なぜであろうか。

『大東世語』卷二(文学)に次の一節がある。

嵯峨隱君子（源清）、或いは云ふ、是れ弘仁帝の子と。少長より冠婚せず。人と接せず。閑居して学に耽る。究めざる所無し（世伝ふ、隱君子は元稹の詩「是れ花中偏に菊を愛せず。此の花開きて後更のちに花無し」を愛吟すと。忽ち元の形を見る。之に示して曰く「此の花開き尽くして、是と為す。後の字に伝作するは誤りなり」と）。橘広相（神祇伯。峰範の子。参議、左大辨、式部太輔、贈中納言）、博士の魁為り。亦た通ぜざるに遭へば即時、馬に策もちうち必ず西山いたに造りて質問す。明了ならざること無し（広相、書を読むこと敏速。横看便通、字行滞らず）。

元稹の「此の花開きて後更に花無し」は『和漢朗詠集』にも採られた有名な詩句であるが、これは正しくは「此の花開き尽くして……」であるという説話である。¹³それはさておき、『大東世語』によれば、源清は「嵯峨隱君子」と同一人ということになる（一章で、嵯峨隱君子は「二つの詩集」に詠まれたと書いたが、これをふくめると三つの詩集ということになる）。¹⁴もう一首、『咏史百絶』から「金田時光」を引く。

金家秘曲伝難得 金家の秘曲 伝へ得難し

玉笛携来不肯吹 玉笛携へ来たつて肯て吹かず

大極殿中風雨夜 大極殿中 風雨の夜

友人傾耳待多時 人有り 耳を傾けて待つこと多時

時光は秘曲を簡単につたえることをせず、秘曲を知るために大極殿で耳を傾けて聴く人がいたという逸話である。『今鏡』巻六（ふちなみの下）が出典というが、「ときみつ」の名字は『今鏡』に出てこない。¹⁵実は「金田」という名字も『大東世語』巻四（企羨）に見える。「武能は金田時光と同時の後生なり。意、相下らず。時の相公命じて時光が弟子為らしむ。（略）武能曰く『相公、我に命じて君が教へを受けしむ』と。『何をか受けん」と欲す』問ふ。曰く『食入調は未だ得ざる所のみ。願はくは授けられんことを』。（略）後、大極殿に隠れ之を伺ふ。蓋し窃に聴きて此れを得んことを欲す」というのである。ちなみに堀誠「『大東世語』「企羨」篇・「傷逝」篇注釈稿¹⁶」は「金田時光」について、もてあましぎみに「豊原時

光のことか。(略) この段の典拠の『今鏡』「総合の歌」の本文中には後冷泉天皇の代の年号である「永承」が見られることから、時代は相違ない」と書く。

小林畏堂が「源清」を詠み、東夢亭が「金田時光」を詠んだのは、『大東世語』のこれらの条が頭にあつたためかも知れない⁽¹⁷⁾。彼らは原典を読みながら詩を制作したのではなく、直接的には『大東世語』によってこれらの詩を詠んだのである。

勿論、ふさわしい逸話が『大東世語』におさめられていない文人もおり(たとえば都良香)、これを典拠とすることでは説明できない詠史詩も多い。しかし反対に在原業平や小野小町が王朝の名人でありながら、必ずしも詠史詩で多くは詠まれているのは、彼らの逸話が『大東世語』に見えなかったからであるという可能性も考えられよう。

かつて日野龍夫は、我が国の歴史に取材した漢詩が林鶯峰にあることに関連し、次のように書いたことがある。

大きな流れとして、初期林家の時代、つまり啓蒙の時代が終わり、詩文の担い手が、伊藤仁齋一門、木下順庵一門、荻生徂徠一門と移ってゆくにつれ、漢学者・漢詩人たちは中国の専門家となり、国史のことまでカバーしようとする意識を持たなくなる。その関心は中国の歴史・文物に集中し、国史の人物・事件を詩文に取り上げることがほとんどなくなる。やがて古文辞派の叙事文の提唱によって軍記物語などの漢訳が試みられるようになり、そのあたりを転換点に、漢学者・漢詩人に国史への関心が復活して、大坂の混沌社の詩人たちが国史上の人物を題に詠じた七言律詩一二〇首を収めた『野史詠』(天明六年刊)⁽¹⁸⁾などが出現するに至る。

初期林家のあと、木門・護園派の時代に我が国の歴史を詠じた漢詩が減少したことは、日野氏の指摘どおりである。ただし彼らが中国の専門家となつてしまひ国史への関心が低下したとまでいって良いかは疑問ものこる。木門の新井白石は『読史餘論』を書いた歴史家でもあつた。また『大東世語』を著したのは護園派を代表する詩人服部南郭だが、もし国史への関心がなかつたなら、こういった著作を思いついたとも考えにくいからである。

服部南郭は国史に関心はあつたものの、それを漢詩に詠むことはしなかつたというのが、実際に近いのではあるまいか。

漢詩に詠まなかった理由は、南郭にとつての理想は盛唐詩であつて、和臭は避けるべきものであつたからだ。しかしながら、ほかならぬ南郭によつて散文にまとめられた我が国の歴史上の逸話がもとになり、やがて岡田新川以降の世代にいたつて詠史詩という花を咲かせたのであろう。

ひとつの仮説として提示しておく。

注

- (1) 『江戸古典学の論』(平成二十三年、東京、汲古書院、一八一―一九〇頁)。
 (2) 『新日本古典文学大系32/江談抄 中外抄 富家語』(平成九年、東京、岩波書店) 一九九―二〇一頁。
 (3) 『新日本古典文学大系36/今昔物語集 四』(平成六年) 四三三―四三四頁。
 (4) もう一首を書き下す。「菅郎の文藻 自づから新清。藝苑誰か能く甲乙評せん。但だ朝綱詩句の合するが為に。此の花終に一双の名を作す」。転句の「朝綱」は、大江朝綱(後述の『皇史摘詠』を参照)。
 (5) この詩集におさめる「菅原文時」は、もう一首ある。書き下す。「花外春風 禁鐘を送る。毫を含んで黙坐す 是れ文宗。君王興尽きて還た興添ふ。佳序わづかに成つて六龍を回らす」。「佳序」については、注6を参照。
 (6) 「忠讜」は、忠義で正しいこと。「三鼎」は未詳だが、文時が要職を占めるにいたらなかつたことをいうのであろう(科挙の状元・榜眼・探花を「三鼎甲」という)。また第八句は、帝の求めに応じて文時がつくつた「花光、水上に浮ぶ」という詩の序を、『本朝文粹』におさめたことを指している。
 (7) ちなみに、寛文八年(一六六八)に刊行された『史館茗話』という書物がある。このなかにも、件の『江談抄』にみえる小野篁の逸話があるが、本問洋一『史館茗話』(平成九年、東京、新典社)は『江談抄』の記述と『史館茗話』を比較して、「『江談抄』がいかに説明に流れている印象を拭いきれないのに対し、『茗話』は両者の対話を挿入し、篁の表情まで補つて、臨場感を高め、最後に帝の驚きの種明かしをするというように、話の記述・展開に工夫が見られ、逸話としてより良くまとまつた構成に変貌している」(五七頁)と評価している。
 (8) 『新日本古典文学大系32/江談抄 中外抄 富家語』一〇七頁。
 (9) なお、第七句「金滕」は『書経』に由来する。周の武王が病氣になつたとき、弟の周公が身代わりになることをいのつた文書を、金の帯(金滕)で封印した箱に入れた。武王の死後、周公は讒言され追放されたが、激しい風雨や雷がつづいた。やがて武王を継いだ成王が金滕をひらいて周公の真意を知り、彼を呼びもどしたという。
 (10) 四月二十七日に関白宣下を受け、五月八日に没した。したがつて厳密には七日ではない。

- (11) 『大東世語』論(その二) (『東洋文学研究』17号。昭和四十四年三月) 八二～九九頁、『大東世語』論(二二) (『中国古典研究』16号。昭和四十四年六月) 九〇～一一八頁、『大東世語』論(その三) (『中国古典学研究』17号。昭和四十五年十二月) 二七～五二頁。
- (12) 堀誠・岡田あやこ・塚野晶子・永田英理著。「早稲田大学大学院教育学研究科紀要」15号(平成十六年三月) 一～三三頁。
- (13) 橘広相が書籍を「横看」すなわち「横さまに」見たことは、『江談抄』(第五)に見える。
- (14) ちなみに『晞髮偶詠』『咏史百絶』にみえる「嵯峨隠君子」を書き下す。前者は、「王孫弱冠已に賢と称す。博物多聞 茂先に似たり。日は図書を玩びて黙記多く。身は婚宦を辞して高眠足る。城西の公府 名殊に重く。谷口の幽棲 地自づから偏なり。応に晚香の隠趣に宜しきが為なるべし。好んで吟ず 才子菊花の篇」。「茂光」は、晋の張華(『博物誌』の著者)の字。「城西公府」は、隠君子の住む嵯峨が都の西にあたることを指す。「才子菊花篇」は勿論、元稹の「是れ花中偏に菊を愛せず」という詩句である。後者は、「元の才子没して詩魔と作る。彷彿として魂来たる、隠者の家に。会意何ぞ須いん、一字を論ずるを。此の花開きて後、更に花無し」。次のような注がある。「隠君子、姓字を詳かにせず。一日、琴を弾き、偶たま元稹の『此の花開きて後、更に花無し』の句を歌ふ。稹の霊、人に託して曰く『我自ら此の句を愛す。故に感じて来たるなり。但し後の字誤れり。当に開尽と作りて之を吟ずべきなり』と」。
- (15) 『新訂増補／国史大系21下』(昭和十五年、東京、吉川弘文館、一三六～一三七頁)にはこう書かれている。「その御こはむねとしの大納言。御はは宇治の大納言たかくにのむすめなり。管絃のみちすぐれてをはしけり。ときみつといふ笙のふえふきにならひ給けるに、だいいきてうのにうてうをいまいまして、としへてをしへまさざりけるほどに、あめかぎりなくふりて、くらやみしげかりけるよいでき、こよひかのをしへたてまつらんと申ければ、いぶかりて『とくとく』とのたまひけるを、『とのうちにてはをのづからきくも侍らん。大ごくでんへわたらせ給へ』といひければ、さらにうしなどとりよせてをはしけるに、『御ともには人侍らでありなん。ときみつひとりまひらん』とて、みのかさきてなんありける。大ごくでんにをはしたるに、なをおほつかなく侍とて、つぎまつとりのいでして更にともしてみければ、はしらにみのきたるものたち侍ありけり。『かれはたれぞ』ととひければ、『たけよし』となのりければ、『さればこそ』とて、そのよはをしへまさでかへりにけると申人もありき。又かばかり心ざしありとてをしへけりともきこえ侍りき』(二重カギ、句読点など、一部表記に手をくわえた)。
- (16) 『早稲田大学教育総合科学学術院学術研究(人文科学・社会科学編)』60号(平成二十四年二月) 五七頁。実際の執筆は橋本麻美。
- (17) ただし「金田時光」の名は、これより早く『本朝蒙求』に見える。
- (18) 『近世儒家文集集成第十二巻／鷲峰林学士文集』平成九年、東京、ペリかん社) 一六頁。
- (19) ちなみに明暦三年(一六五七)の林羅山『日本百将伝』、寛文元年(一六六一)の浅井了意『本朝女鑑』など、近世前期に我が国の人物記が多数書かれたことは、本間洋一『本朝蒙求』剽記』(『同志社女子大学／学術研究年報』53巻、平成十四年十二月、一七六～二〇六頁。のち『本朝蒙求の基礎的研究』大阪、和泉書院、一～三五頁に再録)に詳しい。

【キーワード】

・ 日本近世文学
・ 日本史
・ 平安時代
・ 川柳
・ 服部南郭